

林芙美子生誕一二〇年を迎えて

館長 今川 英子

この夏ほど猛暑の日々が続いたことがあったでしょうか。しかもこのろろ台風は日本各地で豪雨や強風の被害をもたらし、国外でもハワイ島の大火災、トルコ・シリアの大地震やリビアの大洪水と天変地異が絶えません。地球の未来に暗澹たる気持ちでいると、どこからか、「やってみろー！」「してみろー！」とワクワク感一杯の元気な子どもたちの声が響いてきます。

今夏の企画展は待望の「長野ヒデ子展」。

せとうちたいこさんシリーズで知られる今治出身の長野ヒデ子さんは、鹿児島をはじめ、熊本、長崎など十三回も引越しをしますが、本との出会いが自分と人をつないでくれたと振り返ります。そのたびに豊かな人間関係を作り、福岡では、あまんきみこ、山下夕美子、世良絹代、門司秀子、みずかみかずよさんと知り合い、この地で絵本作家となるのです。そのきっかけについて、「子ども目線」とは、「体を低くしてこどものような目線」ではなく、「知性・教養・経験をすべてなくし、人格と人格で向き合うこと」と元小学校の教師から教えられ、そんな風になりたかったからと言われています。

毎年夏の展覧会にはたくさんの子どものたちがやってきます。一緒にイベントに参加することも多いのですが、そのたびに、自分の全部が見透かされているような気がします。ことに幼児は嘘や体裁を見逃してくれません。晒された素の自分に向き合う時でもあります。

今年も門司で生まれた林芙美子の生誕一二〇年です。思いがけなく作家の柚木麻子さんがテレビ番組で『放浪記』を取り上げたことで、『放浪記』が増刷となり、新しくアンソロジーも編

まれています。一億総中流と言われた高度経済成長期以降、あの苦しい時代は思い出したくないと芙美子の作品は読まれなくなっていました。ところが今や格差社会のひずみがあちこちで顕現し、再び手に取る若い女性たちが増え、時代を超えて励まされているのです。彼女たちは森光子の舞台『放浪記』を知りません。あるいは芙美子は従軍してルポルタージュを書いたことから戦争協力者とも言われましたが、内容を丁寧に読み込んだ作家が、そのレットルを覆す発言をしています。しかしそうであっても芙美子の人となりについては、相変わらず葬儀の時に川端康成が挨拶したという「時にひどいこともした」が、孫引きで引用されています。

芙美子は婚外子で貧しい行商人の養父と母に育てられ、後ろ盾もなく全くの徒手空拳で流行作家の頂点に立ちました。現在のようにジェンダーもフェミニズムもない時代、どれほどの嫉み妬みの中で、蔑まれ排斥され嫌がらせを受けたことでしょうか。女からも男からもです。それでも芙美子は孤立無援で最期まで強靱な詩精神を失わず、庶民に寄り添い庶民の作家として生きることを願いました。

当館が収蔵する五六〇点に及ぶ芙美子宛書簡には、差出人との関係性が不明であるものも含めて、その文面の甚深な内容に豊穡な人間関係を垣間見ることが出来ます。中には十数通の手紙を芙美子に送りながら、没後、一通も出したことはなかったとうそぶく大家もいます。

四七歳で逝った芙美子の死から七二年。巷間の言説を超えて、真実の林芙美子に迫る時期に来ていると思われれます。

目次

○ 巻頭コラム 林芙美子生誕一二〇年を迎えて	1	○ 〈共催〉「アメリカ文学 その広大さと多様さ」 (第45回光草書道展)	6
○ 企画展	2	○ 収蔵資料紹介 火野葦平「木綿襟志」(1)	
○ 「生誕120年記念 拝啓 林芙美子様—芙美子への手紙—」		○ 林芙美子忌の集い	7
○ 連続講座「林芙美子の生涯と作品」	3	○ 宗左近忌	
○ 第32回特別企画展	4	○ 劉寒吉 碑前の集い	
○ 「長野ヒデ子の絵本と紙芝居展」		○ 北九州森鷗外記念会「森鷗外を偲ぶ会」	
○ オープニングイベント	5	○ 友の会自主企画「やさしい文章教室」	
○ 長野ヒデ子さんによるギャラリートーク、お話の会		○ 朝比奈秋さんが第36回三島由紀夫賞受賞	
○ ワークショップ		○ 展覧会予告	8
○ 「プラプラ人形をつくろう！」		○ 〔第33回特別企画展〕 「写真と文学でたどる日本の世界文化遺産」	
○ 絵本と紙芝居の読み聞かせ(友の会主催イベント)		○ お祝い、お悔やみ/寄贈者・提供者、提供雑誌	

企画展 生誕120年記念
拝啓 林芙美子様
 芙美子への手紙

2023年
 5月20日(土)
 6月30日(金)

9:30~18:00(入館は17:30まで)
 ※月曜日、6月2日(金)・3日(土)は休館
 ■主催 / 北九州市立文学館

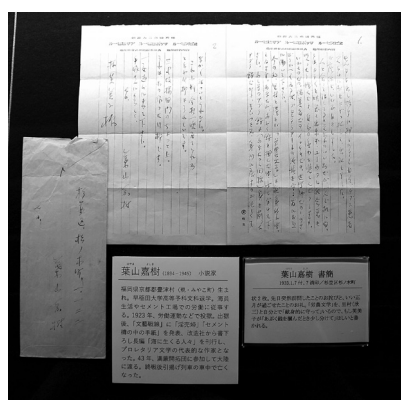
林芙美子の生誕120年を記念し、当館所蔵の芙美子の手紙を時代によって紹介し、川端康成、井伏鱒二、宇野浩二など同時代の作家をはじめ、ジャーナリスト、編集者や書評家として、芙美子の生涯と作品、当時の社会情勢などを浮かび上がらせていきます。

◆連続講座 林芙美子の生涯と作品
 講師 北九州市立文学館館長 今川英子
 (日時) ①6月17日(土) ②6月24日(土)
 両日とも13時30分~15時
 (定員) 50名(各回)
 (申込み) 文学館 093(57)11050
 ◆連続講座による展示解説
 (日時) 5月20日(土)・5月27日(土)・6月10日(土)・
 6月24日(土) 各日とも11時から40分程度
 (申込み) 電話で受付
 (文学館) 093(57)11050

作家の手紙と云ふものは、何と云ふおぼろびあつて魅力があるのは、感情生活が豊かで、子供と同じやうに、自分の性格をあまり隠さないからでせう。 林芙美子 日記

門司生まれの小説家・林芙美子の生誕一二〇年にあわせ、所蔵資料による企画展「拝啓 林芙美子様―芙美子への手紙」を開催しました。書簡をとおして、芙美子の生涯と作品、当時の社会情勢などを浮かび上がらせました。当館所蔵の林芙美子宛の書簡は、「放浪記」の連載が人気を得ていた一九二九(昭和四)年から、急逝する一九五一(昭和二六)年までの約五六〇点です。本展ではそのうち、初公開五〇点を含む七三三点(差出人は六七人)を展示。差出人は同時代の作家をはじめ、ジャーナリスト、編集者、画家、学者、実業家、政治家など多岐にわたり、パネルでプロフィールも紹介しました。

初公開資料から三点紹介します。
 京都郡豊津村(現みやこ町)出身



葉山嘉樹書簡

無力を悲しんだりします」と心情を吐露する文面も見られます。最後に「身を削ったアブク銭」は「身内に戻すのが忙しくてなかく居ついてくれないう」ため、「芙美子が」あぶく銭をつかんだ時、少し分けて下さい」と自作の川柳を添えて書かれ、深刻な内容ながらもユーモア交じりの書きぶりに葉

の葉山嘉樹の書簡(一九三三年一月七日付)は、正月に芙美子を訪ねたことへのお礼に始まり、「人と会って話していると元気のいい私だが、一人で机に向つてはカラ／＼と哄笑も出来ず、ユーウツに社会悪を呪つたり憎んだり、自分の

山の人物像が垣間見える書簡です。装幀家、美術評論家の青山二郎の書簡は所蔵二通のうち一通(一九三八年一月七日付)を展示しました。「画を頂いて非常に永い間／お約束の焼物差上げずに失礼して居ましたが何とも適／当なものがなく出鱈目に何／か差上げるのも良くない事／で遂々延々になっておました／が、此度浜田庄司氏の展／覧会があり自慢して差／上げてもいい、鉢が一点あり／ましたからそれに決めてお／送りする事にしました」と書かれ、絵画や焼物など芸術作品への審美眼を共通項として交流があったことが分かります。青山は芙美子の書籍『蜜蜂』『一人の生涯』『雨』などの装幀も手がけており、あわせて展示しました。



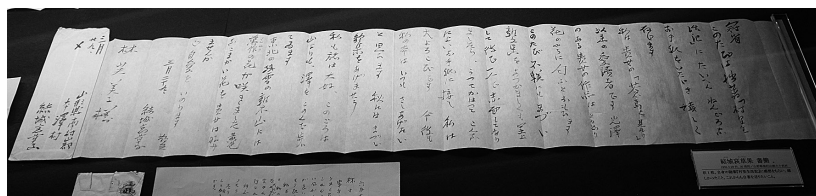
青山二郎書簡(右)と装幀本

歌人、随筆家の結城哀草果の書簡(一九三五年三月二九日付)は、哀草果が謹呈した『村里生活記』に対して芙美子が送った手紙へのお礼。「貴女の「蒼馬を見たり」／以来の愛読者です。光沢のある貴女の作品は、とりどり／花のやうに匂ふとおもひます」と記さ

れます。また、「今後も／私の本はいつもさしあげたい／と思ひます。秋にはまづい／歌集をあげませう」と書かれ、当館に遺る他八通の手紙の内容も芙美子が送った著書へのお礼であることから、双方で自著をおくりあったことが分かります。

【主な差出人 ※五十音順】 青山二郎(装幀家、美術評論家)、井伏鱒二(小説家)、宇野千代(小説家)、梅原龍三郎(洋画家)、大原富枝(小説家)、川端康成(小説家)、小林秀雄(文芸評論家)、佐多稲子(小説家)、鈴木三重吉(児童文学者)、芹沢光治良(小説家)、竹内てるよ(詩人、児童文学者)、裕伊之助(洋画家、陶芸家)、長谷川時雨(劇作家、

また、期間中は学芸員が展示書簡の内容や差出人と芙美子とのかかわりなどを紹介する展示解説を四回行い、多くの方に参加いただきました。



結城哀草果書簡

小説家)、葉山嘉樹(小説家)、樋口富麻呂(日本画家、版画家)、深田久弥(小説家、登山家)、堀口大學(詩人、フランス文学者)、松尾邦之助(ジャーナリスト)、三輪寿壯(政治家)、八木義徳(小説家)、保高德蔵(編集者)、山本有三(小説家、劇作家)、結城京草果(歌人)、横光利一(小説家)、吉屋信子(小説家)、渡辺一夫(仏文学者、評論家)など。



展示のようす

来場者の声(アンケート)

・手紙から人物にアプローチするところが面白く、人物像を想像しながら観覧できて良い時間だった。(16〜19歳)

・ダイナミックに移動し、多くの方々と交流していた美美子のエネルギーに感激した。(60代・小倉南区)

・作品から感じていた人物像がリア

ルに浮かび上がって来て、人間に對する深い洞察がどこからきているのか少し分かった気がした。(70代・八幡西区)

連続講座

「林美美子の生涯と作品」

二〇二三年六月一七日・二四日
林美美子研究者の今川英子館長による講座を開催しました。

初めに、生誕一二〇年の今年、美美子のアンソロジーの刊行や、「放浪記」がテレビ番組で取り上げられるなど注目が集まっていることを紹介しました。特に作家の柚月麻子さんが、美美子の文学は「食」と「経済」がテーマだと指摘する読みを紹介し、美美子が新しく読まれようとしていると話しました。

講座では、時代背景とともに生涯と作品を辿りました。

美美子が生きた時代(一九〇三年〜一九五一年)は、日露戦争、関東大震災、日中戦争、第二次世界大戦などがあり、美美子はまさに怒涛の時代を駆けぬけた生涯でした。今川館長は、美美子の前半生について、貧しいながらも両親からの愛情を十分に受けていたこと、尾道時代の豊かな読書体験が文学的才能を伸ばしたこと、上京後様々な職業に就きながら「書く」ことで耐えたことなどを紹介。やがて大ヒットした『放浪記』は、プロレタリア文学系の作家からは思想がないと批判されたが、美美子は権威や流行に媚びず、

自分が生んだところの思想によって書いていたことを指摘し、だからこそ時代を越えて今も読まれているのではないかと話しました。

美美子の海外体験についても紹介しました。特に、渡欧は美美子を大きく成長させたといえます。自分で稼いだお金(『放浪記』の印税)で、女性一人で、満州事変が起きた直後の大陸をシベリア鉄道で横断しました。途中で、当時社会主義革命を成功させていたソ連(現ロシア)の街や人々の様子を見て、「また革命が起きるのではないかと随筆に書いており、自分の皮膚感覚でものごとを見ていたことが分かります。パリ滞在中は森本六爾(考古学者)、白井晟一(のち建築家)など日本人留学生たちとの出会いがありました。また、美美子は最先端の文化芸術にただ憧れだけもったのではなく、日本(アジアを含めて)の美しさ、「美しい日本語」に覚醒して帰国したことなどを紹介しました。

そのほか、交流のあった哲学者・九鬼周造の随筆「小唄のレコード」の内容から、九鬼は、美美子が亡くなったあとに作られた美美子像ではなく、「虚無の深淵」(同随筆)が分かっていた彼女の本质を見抜いていたのではない

自分が生んだところの思想によって書いていたことを指摘し、だからこそ時代を越えて今も読まれているのではないかと話しました。



今川館長

かと推察しました。

最後に、戦後書かれた短編「吹雪」「沙魚」「骨」「晩菊」「下町」や、長編「茶色の眼」「浮雲」を紹介され、これからの若い人たちの「読み」に期待も込めて講座を終りました。

受講者の声(アンケート)

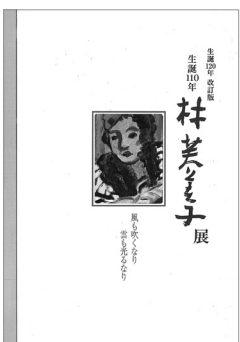
・彼女だけのまなざし、生活を視る一定の視線の謎をとくきつかけがつかめたような気がします。(40代・門司区)

・林美美子が大変な時代を堂々と生きた様が伺えました。(80代・嘉麻市)

・あらためて作品を読んでみようと思いました。ゆかりの地を調べて訪ねてみたいと思います。(50代・八幡東区)

生誕一二〇年にあわせて、図録「生誕110年 林美美子展―風も吹くなり雲も光るなり」の改訂版を発行しました。改訂版では、全国の美美子ゆかりの施設(文学館、博物館、記念館など)や文学碑の情報を更新しています。

販売価格は七〇〇円、文学館インフォメーションで販売しています。





2023年7月22日(土)～9月18日(月)



第三二回特別企画展は、「長野ヒデ子の絵本と紙芝居展」を開催しました。長野ヒデ子さんは、子ども文庫活動から創作活動を開始し、絵本、紙芝居、イラストレーションなどの分野で活躍されています。展覧会では、絵本、紙芝居あわせて三〇作品の原画や試作本を展示し、長野さんのこれまでの画業を幅広く紹介しました。原画を展示している作品は、その場で読めるように展示室内に絵本を設置しました。

好奇心旺盛なタイのお母さんが主人公の人気絵本「せとうちたいいこさんシリーズ」の原画は、色鉛筆とパステルで細かい部分まで描き込まれた遊び心のある絵が魅力です。命が生まれてくることの素晴らしさを描いた『おかあさんがおかあさんになった日』、長野さんとお子さまとの会話が元となって生まれた作品『おつきさまひとつづづ』などの原画は、色鉛筆を塗り重ねた複雑な色合いが温かい印象を与えます。八幡東区生まれの詩人・みずかみかずよさんの絵本『きんのストロー』の原画も特別展示されました。その他、『まんまんぱっ』(文・長野麻子)、『おにぎりおにぎり』、『プルタちゃんのコロケゲー』※当会場初公開、『海をかえして!』(文・丘修三)、『外郎売』などの原画を展示。ストーリーに合わせて描き分けられた雰囲気異なる原画が会場を彩りました。

また、デビュー作の『とうさんかあさん』や『おばあちゃんがおばあちゃんになった日』の試作本は、長野さんが原画制作にとりかかる前に手作りされたもので、制作過程が垣間見える貴重な資料でした。

展示室外には、絵本閲覧コーナー、写真撮影スポット、やってみたいことを自由に書いてもらう「〇〇ターミー」コーナーを設置。楽しむ親子の姿が見られました。

隣接するカフェ・ラポール中央図書館店では、「せとうちたいいこさん」や絵本に出てくる食べ物モチーフにしたコラボメニューを提供いただきました。

(展示資料点数 約二二〇点)

来場者の声 (アンケート)

- ・原画はやはり迫力があります。明るい絵が元気をくれるように思いました。(50代・下関市)
- ・いのちの大切さ、素晴らしさがひひしと伝わりました。(60代・朝倉市)
- ・色鉛筆で沢山の色を重ねて背景を描いているところが、美しくて素敵だと思いました。(11〜15歳)
- ・絵がこまかくかかれていて、げんきになる絵をかいていて、自分もげんきができました。(7歳)

オープニングイベント
長野「子どもとこころ」
ギャラリートーク、お話の会

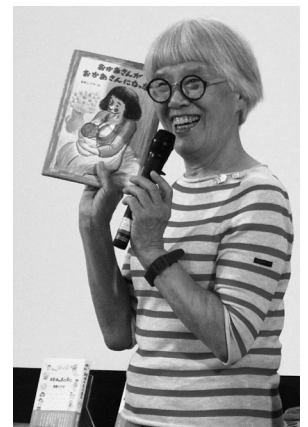
二〇二三年七月二三日

開会式に続き、長野さんがギャラリートークを行いました。人気シリーズの「せとうちたいこさん」は、長野さんの出身地が瀬戸内海の見える場所だったことから生まれました。名前がついた途端にキャラクターが動きだし、好奇心旺盛な性格になったそうです。もし名前が「玄界灘たいこさん」だったら全く違う性格で、違う話になっていたでしょうとユーモアも交えたトークに、会場は笑い声に包まれました。

また、昔に比べ自然に伝承されることが少なくなっているわらべうたを絵本や紙芝居にして伝えたいと、『げんこつやまのためきさん』、『いちわのからす』などを書かれたそうです。語り継がれる歌は、子どもたちを元気にする力があると話されました。

午後からのお話の会では、様々な人との出会い、作品が生まれた背景などをお話されました。

長野さんは太宰府で子ども文庫活動を行っていた頃、『とうさんかあさん』で絵本作家としてデビューされました。後年、この本の魅力について森比佐志さん（児童文学作家・翻訳家）から、子どもと対等に向き合っていると答えたりのことを考えたりするという絵本の原点が全部詰まっているとところだと



長野ヒデ子さん

言われ、とても嬉しかった思い出を話されました。また、現・相模原市で農業小学校を開いた今西祐行さん（児童文学作家）が、農業と創作は同じとおっしゃったエピソードを紹介。農作物は種を蒔いて収穫されるまでにお日さまなどの力をもらい育つ。創作も同じで、アイデアは自分のなかで十分に発酵してから取り出して作品にしてくださいと教えられたそうです。長野さんご自身の体験や、「お母さんがお母さんとして生まれる本を作りたい」というアイデアなどが発酵してできた絵本『おかあさんがおかあさんになった日』が生まれました。

長野さんは、「絵本は子どもから大人までのもの。難しいことを、分かりやすい言葉、短い文章で書き、奥が深くて楽しいもの。忙しい日々でも短い時間で読むことができるし、子どもに読むと顔がバラ色になる。ぜひ読んでほしい」と呼びかけ、いい絵本を手にするためには、出版文化を皆で支えていくことが大切と言われました。紙芝居の上演も交えながら、親子で楽しめるお話の会となりました。

参加者の声 (アンケート)

・長野さんの作品は、たくさんの方々との繋がりを大切にされた思いがこもった作品なのだと、お話を聴いてあらためて思いました。
(60代・大分県)

・作品が作られた背景やエピソードを大変興味深く聴かせていただき、満足しています。
(30代・八幡東区)

ワークシヨップ

「ブラブラ人形をつくらう！」

二〇二三年七月二三日

長野さんを講師に、「ブラブラ人形」を作るワークシヨップを開催しました。親子の参加者が多く、長野さんは初めに、子どもの発想はおもしろいので大人は見守るだけにしようというアドバイスされました。参加者は、せとうちたいこさんをはじめ、好きな動物を体のパーツごとに自由に描き、切り抜き、糸でつなげていきました。最後に、完成した人形をぶら下げて長野さんと記念撮影も行いました。人形は会期中展「ふたご」で、会場を賑やかに彩りました。



参加者の声 (アンケート)

・自由な発想でももしろい作品ができて、発見でした。
(40代・八幡東区)

・たのしかったです。またきてください。
(10歳以下・小倉北区)

絵本と紙芝居の読み聞かせ

(友の会主催イベント)

二〇二三年八月六日・一九日

九月三日・一六日

ブックネットワーク北九州（代表・仲紀子さん）の皆さんが、長野さんの絵本と紙芝居の読み聞かせを行いました。『せとうちたいこさん』デパートいきタイ』などの人気作をはじめ、『まんまんぱつ』、『おにぎりおにぎり』などリズムカルな言葉が多用されている作品を朗読し、参加した方も一緒に声を出して楽しんでいました。途中で手遊びや余興をささみながら、親子で楽しんでいただけました。



共催「アメリカ文学

その広大さと多様さ」
(第45回光草書道展)

二〇二三年四月二十九日～五月七日
光草書道会（橋村雅榮会長） 主催の
書道展は今回、アメリカ文学を取り上
げました。制作に向け、学びを深めて
いくなかで、会員が心を動かされた
というアメリカ文学の「広大さ」「多様さ」
をサブテーマに、さまざまな作品を展
示しました。

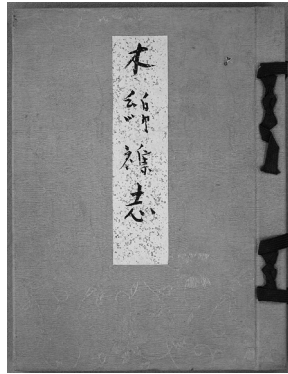
会期中には、会員向けの講義も担当
された江頭理江さん（福岡教育大学教
授）の講演会も開催しました。予想を
越える参加者に、アメリカ文学への関
心の高さがうかがわれました。

来場者からは、「書道で英文字を書い
ているところや、ひとつの作品の中に
縦書き、横書きが混在しているのが興
味深かったです」などの声があり、書
の新しい表現に関心が寄せられました。



収蔵資料紹介
火野葦平「木綿襪志」(1)

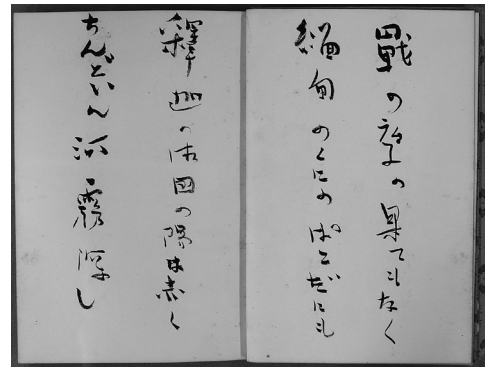
火野葦平の自筆資料「木綿襪志」を
紹介します。本資料は作家・劉寒吉の
旧蔵で劉の長男である濱田源一郎氏よ
りご寄贈いただいたものです。二〇二
〇年秋に開催した「没後60年 火野葦
平展」レットテルはかなしからずや」
で展示・公開しました。



表紙

資料のサイズは二四二×一八二×一
六（ミリ）、頁数は五八頁。内容は、
火野葦平の手による文語定型詩「印度
進軍賦」と「比島出陣賦」が記され、「印
度進軍賦」の後には、「樵」の署名で、
葦平の友人であるロシア語翻訳者で詩
人の中山省三郎の詩があり、「比島出
陣賦」の後には、作家・日比野士朗の
短歌が記されています。今回は、「印
度進軍賦」を紹介します。

「印度進軍賦」は「昭和十九年四月
二十三日」の日付があります。葦平は
翌々日の二十五日、陸軍報道班員とし
て、父・玉井金五郎、友人の中山省三郎、
河原重巳、中村勉らが見送る中、福岡・
雁ノ巣飛行場からインド・インパール
へと出征していきました。以下、本文
を紹介します。



【翻刻】

印度進軍賦
火野葦平

戦の庭の果てもなく／緬甸のくにのぼ
こだ⁽¹⁾にも／釋迦の御国の陽は赤く／
ちんどのいん河⁽²⁾霧深し／にはかに起る
どよめきや／軍靴の音のかすかなる
／鉄の兜にきらめける／月乃光の青さ
かな／みいくさゆけばたちまちに／か
んぐらとんぎ⁽³⁾陥りて／こひま⁽⁴⁾も指
呼に見いでたり／眼下にうつるかの街
は／敵のた乃めるいんばある／ろくた
く湖⁽⁵⁾畔の水きよく／樹々はみどりに
花赤に／兵の簾の草香る／峠を攀ちて
見はるかす／でりの道を眺に／望み
てゆけば 美しき／御旗の色目に痛
く／醜の御桶と征でゆける／数ならぬ
身も嬉しけれ／昔征師の神の裔／胸に
うけつぐ火の熱く／兵隊たれば銃とり
て／野越え山越え雪越えて／征きて還
らぬ心こそ

昭和十九年四月二十三日
翼にまたがりて新戦場に出づるの日

雨過ぎてひととき／明るとみれば、
／忽ち暮るる冬の日、／黙々と、くぐり
ゆく青の洞門、／年老いし獵人が肩に
せる鶴一羽、／子供のやうにからだを
ゆすぶつて／徑に人のとほり過ぎるの
を／待つてゐる栗毛の小馬、／炭をつ
けた馬、／溪流は木立のかけを遠く流
れる。／山国川の溪ふかき／宿場の庭
に／つながれし 馬の嘶き、／果しな
き旅の愁にふりかかる／熔岩臺地の松
のうへの空、／あんなにも重たい木を
背負つて、／丸木橋を渡つてゆく 子
供、／ひよどりが鳴けば／ひよどりの
声を真似て、／寂しさも覚えず 冬の
日の暮るる頃哉。

耶馬溪にて
樵

※／は改行。

【註】

- (1) pagoda 仏塔を意味する英語。日本ではミャンマー（ビルマ）様式の仏塔を指すことが多い。
- (2) チンドウイン川のこと。ミャンマー北西部を流れるエーヤワディー川最大の支流。
- (3) カングラトンビとも。インドのマニプル州西インパール県ラムサン郡の村。インパール北部郊外、インド国道2号線のインパールとコヒマを結ぶ線上に位置する。
- (4) インド北東部、ミャンマーとの国境地帯にあるナガランド州の州都。
- (5) インド北東部マニプル州の都市ビシエンプール南東にある南アジア最大の淡水湖。水草の浮島が無数に点在する沼沢地。画家の向井潤吉は葦平とともにインパール作戦に従軍し、「ロクタク湖白雨（インパール前線）」を描いた。

林芙美子忌の集い

二〇二三年六月二十五日

林芙美子忌の集いが門司の小森江西市民センターで開かれました。毎年芙美子の命日（六月二十八日）に近い日曜日に開催されており、小森江の地域の方々と門司区の関係者が参加しました。昨年までのコロナ禍の三年間は、関係者のみで「林芙美子生誕地記念文学碑」での献花を行っており、一般参加も含む集いとしての開催は四年ぶりでした。

イベントのなかで、林芙美子の生誕一二〇年にあわせて文学館で開催していた企画展「拝啓林芙美子様―芙美子への手紙」の展示書簡を、当館学芸員小野恵が紹介しました。松下文字（詩人）から芙美子宛（一九二九年一〇月二五日消印、一九三〇年一〇月二九日消印）、井伏鱒二（小説家）から芙美子宛（一九三二年一〇月二九日付）、川端康成（小説家）から芙美子宛（一九四七年七月三日付）、葉山嘉樹（小説家）から芙美子宛（一九三三年一月七日付）の五点を時代背景とともに紹介しました。

最後にカーネーションの献花を行い、芙美子を偲びました。



宗左近忌

二〇二三年七月七日

昨年、宗左近記念碑「鐵偶」が建立された戸畑図書館で、宗左近忌が開催されました。例年、宗左近の命日である六月二〇日でしたが、今年は七月七日の開催でした。

「鐵偶」前で参加者の記念撮影の後、館内に移動し、主催の宗左近ファンクラブ代表世話人の自見榮祐さんの挨拶ののち献花が行われました。続けて、会員の九州共立大学の太川内夏樹さんと当館学芸員の稲田大貴による、六月二五日に青山学院大学で行われた日本近代文学会でのパネル発表「宗左近の〈戦争の記憶〉と〈縄文〉言説」の報告がありました。雨天ではありましたが、碑前での撮影の時には晴れ間もぞき、詩人を偲び、その仕事を振り返る集まりとなりました。



劉寒吉 碑前の集い

二〇二三年四月二〇日

「翁」や「十時大尉」などで芥川賞、直木賞の候補となった作家・劉寒吉の命日である四月二〇日、劉の出身校の福岡県立小倉商業高等学校主催で、文学館・中央図書館前庭の劉寒吉文学碑前にて偲ぶ会が開催されました。

劉寒吉は文芸同人誌「九州文学」を生涯、屋台骨として支え続け、鍛冶町の森鷗外旧居の保存、歴史博物館、美術館の設立など、北九州の文化振興に尽力しました。

式典では関係者の挨拶と、中央図書館長、文学館長などの講話ののち、小倉商業高校の生徒たちが劉作詞の校歌と「紫川の歌」を合唱しました。春の陽光の下、劉の足跡に思いを寄せる集いとなりました。

森鷗外を偲ぶ会

二〇二三年六月一九日

森鷗外は一八九九年六月一九日に第十二師団軍医部長として小倉に着任しました。これを記念し、北九州森鷗外記念会が毎年六月一九日、紫川河畔の文学碑前で偲ぶ会を開催しています。

今年は、武内和久市長の挨拶ののち、小倉商業高校の生徒が「小倉日記」の一節を朗読。参加者は献花で森鷗外の小倉滞在を偲びました。

その後、北九州森鷗外記念会理事の石井郁男さんによる講演「森林太郎から文豪森鷗外へ」が行われました。

友の会自主企画 「やわしい文章教室」

二〇二三年七月二九日、八月一九日

夏休みの子どもたちに向けた、昨年度好評の「やさしい文章教室」を今年も実施しました。本や言葉に親しんでもらうために、実践的に読書感想文や詩の書き方が全二回で学べるものです。小学三年生から中学一年生一六名とその保護者が参加しました。

講師は、北九州市内の小学校・中学校で教鞭をとっていた友の会副会長の江口恵子さん（九州女子大学特任教授）。本選びの視点や文章の構成など、わかりやすい解説に、参加者は熱心に耳を傾けていました。

参加した子どもたちからは、「読書感想文や詩の書き方が分からなかったのに、教えてもらえてよく分かった」、保護者からは、「学校でもこのような教室があると、作文に苦手意識がなくなるのではないかと思った」などの声がかれました。

朝比奈秋さんが 第36回三島由紀夫賞受賞

本市が主催する「林芙美子文学賞」第七回大賞受賞者の朝比奈秋さんが、『植物少女』で、第三六回三島由紀夫賞を受賞されました。

朝比奈さんは、「塩の道」で第七回林芙美子文学賞の大賞を受け、同作を収録した『私の盲端』で翌年デビューを果たしました。

現在も現役の医師として働きながら執筆活動を続けておられます。

今回の受賞作品や、これまでの著書は館内で閲覧できます。



写真と文学でたどる

日本の世界文化遺産

10月28日(土) ～ 1月14日(日)

企画協力：クレヴィス

日本の写真界に大きな足跡を残す17人の写真家たちの名作と文学のことばで、日本の世界文化遺産全20件を紹介します。

◎出展作家(生年順・敬称略)

- 入江泰吉 渡辺義雄
- 土門 拳 西川 孟
- 岡本茂男 柴田秋介
- 牧野貞之 江成常夫
- 藤塚光政 水野克比古
- 田村 仁 藤原新也
- 三沢博昭 管 洋志
- 石橋睦美 永坂嘉光
- 三好和義

◎開会記念講話「明治日本の産業革命遺産」のみどころ

日時 10月28日(土) 11:00～12:00
講師 日比野利信さん(北九州市立自然史・歴史博物館学芸員)

◎関連講座

- ①「北九州市の世界遺産」
日時 11月18日(土) 13:30～15:00
講師 井上保之さん(北九州市市民文化スポーツ局長)
- ②「廃墟か、遺産か?文化財・文化遺産・文化資源を想い、魅力を育むまちづくりへ」
日時 12月2日(土) 13:30～15:00
講師 藤原恵洋さん(建築史家、九州大学名誉教授)

すべて申込は10月3日(火)から電話受付(先着各60人)



平等院鳳凰堂夕焼け 1961年
写真：土門拳 © 土門拳写真研究所

お祝い

・平野啓一郎さん(小説家)が、第22回小林秀雄賞を受賞。
・山崎ナオコ(小説家)が、第33回 Bunkamura ドゥマゴ文学賞を受賞。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・黒田杏子さん(俳人)
二〇二三年三月一三日にご逝去、84歳。
・田中丸善昌さん(元小倉玉屋社長、横山白虹友人)
二〇二三年八月一八日にご逝去、90歳。
心よりお悔やみを申し上げます。

■寄贈者・提供者

赤磐市教育委員会熊山分室、阿木津英、朝比奈秋、阿部誠文、荒井千佐代、有川公一、有森信二、石井郁男、茨木市立川端康成文学館、井本元義、いわき市教育文化事業団、内田謙二、大川内夏樹、大土由美、大坪伸子、岡田功、岡山シティミュージアム、尾道市文化協会、おのみち林芙美子顕彰会、かすがい市民文化財団自分史事業、角川文化振興財団、河出書房新社、菊池寛記念館、北岡武司、北九州市立美術館、北九州市立松本清張記念館、北村由成、北山青史、紀伊國屋書店、九州大学日本語学会、群馬県立土屋文明記念文学館、啓隆社、小正路淑泰、小橋啓生、さいたま文学館、坂口和子、朔出版、佐久間庸和、佐藤公平、司馬遼太郎記念館、書肆侃侃房、新葉館出版、

■提供雑誌

仙台文学館、鷹取美保子、竹之内靖方、多田康廣、多摩美術大学大学院美術研究科、短歌研究社、筑紫野市歴史博物館ふるさと館ちくしの、沖積舎、東京都江戸東京博物館、徳島県立文学書道館、智鈴、長野ヒデ子、中原中也記念館、西尾市岩瀬文庫、西村直人、日本近代文学館、日本現代詩歌文学館、沼津市芹沢光治良記念館、姫路文学館、「平野塾」出口敬子、福岡県高等学校国語部会北九州地区部会、福岡市総合図書館、ふくやま文学館、藤井悦子、北海道文学館、前野りりえ、前橋文学館、岬の分教場保存会、水木洋子市民サポーターの会、宮本苑生、三輪建二、森鷗外記念会、柳生じゅん子、山口真一、行橋市歴史博物館、若窪美恵、渡辺幸一、渡邊由利

2023年10月1日発行
北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

- 開館時間
9:30～18:00(入館は17:30まで)
- 休館日
毎週月曜日
(月曜日が休日の場合は開館し、翌日が休館)
年末年始